

P2-015

都市型子育て支援の現状と課題
—子育て支援提供者・利用者へのインタビュー調査より—三木 祐子¹、梶原 祥子²、織田 正昭³¹東京有明医療大学 看護学部看護学科、²帝京大学 医療技術学部看護学科、³福島学院大学 福祉学部福祉心理学科

【目的】

近年、都市部の核家族化や住居の積層化等に伴い、親の子育てで不安が大きいと指摘されている。

本研究では子育て支援の提供者・利用者からみた親の子育ての実際や問題点、住環境や地域特性との関連性を明らかにし、今後の大学教員による出張型子育て支援の可能性を探った

【方法】

東京都23区の複数地域において、子育て支援提供者(専門家)と利用者(母親)を対象に半構成的面接を行い、都市型の子育てや支援に特化した内容に注目し、質的帰納的に分析した。本研究は、研究者の所属大学の倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】

1. 対象者の概要

本研究における子育て支援提供者は、長年、親子に直接子育てで支援を行っている小児科医師・行政保健師・開業保健師・企業保健師・社会福祉士・地域子育てサロン運営者(もと保育士)・幼稚園教諭/保育士養成機関の教員(もと幼稚園園長等)、一方、子育て支援利用者は、専業主婦、有職母親であった。

2. 子育て支援者からみた親の子育てや支援サービスの活用 都内では、親(特に母親)の有職率が高く、高学歴や教育熱心さの背景より「自分のスキルを子育てサロンで反映し自己実現したい・親子で楽しみたい」、「ワーキングスペースを使用したい」希望者が多い。また有名小中学校の受験地域では、「子どもの習い事や塾通いのための支援サービスの需要が高い」が、一方、「塾通いしない小学生の居場所がない」「相談やサービスの窓口に来所した)親自身が何に困っているのか説明できない」ことを問題視している。住環境では高級、またはタワーマンションが急増する中、「セキュリティに守られている環境である」「外出なしでもインターネットや宅配で日受生活用品が得られる」ことより、母子の孤立化を促進する物理的要因も明らかとなった。

3. 子育て支援利用者からみた親の子育てや支援サービスの活用 マンション建設や子どもの教育環境目的の転入者が多い地域では、特に乳幼児とその親対象の支援サービスが急増するも、母親の子育てに関する精神的ストレスは依然多く、「親に寄り添ったプログラムや人材が少ない」と支援内容や運営に不満を感じる声も聞かれた。

【考察】

本研究では、都市型の乳幼児対象の子育て支援の現状や課題を示唆した。近年、情報入手が容易、かつ情報量が豊富な中、利用者は支援の質に着目する傾向にあり、今後親の気持ちに寄り添う具体的支援内容の検討が必要と思われた。

P2-016

父親の育児・家事参加と母親の育児ストレス・抑うつとの関連

弓気田 美香、高橋 泉

湘南医療大学 保健医療学部看護学科

【目的】

育児には父親の協力が欠かせない。しかし父親もどのように育児・家事に参加すれば良いのかわからないことが多い。本研究では父親の育児・家事への参加と母親の育児ストレスや抑うつといった精神状態に与える影響を明らかにし、どのような協力をするにより母親の育児ストレスや抑うつが軽減するのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

小児科クリニックに来院した0～5歳までの健康な子どもを持つ母親196名を対象とした自記式質問紙調査を行った。質問紙は属性、父親の育児・家事参加頻度、育児ストレスの尺度にはPSI育児ストレスインデックス(78項目、「親の側面」8下位尺度「子どもの側面」7下位尺度)を使用した。抑うつ尺度にはQIDS-J(16項目、睡眠、食欲/体重、精神運動状態から評価)を使用した。倫理的配慮として、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会の承認を得た上で、口頭及び文章で研究の目的や意義などを説明し同意が得られた方に質問紙を配布した。分析にはSPSS23、Amos23を使用し、相関、共分散構造分析を行い有意水準を5%とした。

【結果】

平均年齢は母親が34.2(±4.6)歳、父親が35.6(±5.1)歳、子どもが30.1(21.7)ヶ月であった。PSI総点の平均値は181.7(±33.6)で、QIDS-Jでの抑うつ重症度は、重症～中等度が8%、軽度が27%、正常が65%であった。父親の育児参加頻度は「遊び相手」「オムツ交換」が多かった。父親の育児参加とPSI下位尺度「夫との関係」との関連は「食事の世話」(r=-.44)「オムツ交換」(r=-.40)「ぐずった時になだめる」(r=-.46)で、有意な負の相関が認められた。共分散構造分析の結果、父親の育児参加からPSI「夫との関係」への係数が-.42であり、「夫との関係」から「親の側面」への係数は.68、さらに「親の側面」から「抑うつ」への係数は.50であり、すべてにおいて有意な推定値が得られた。適合度指標はGFI=.993, AGFI=.92, CFI=1.000, RMSEA=.000であり、十分な適合を示した。

【考察】

0～5歳の子どもを持つ母親の35%に軽度～重度の抑うつ症状がある可能性が示唆された。父親の育児参加は母親の「夫との関係」ストレスを軽減させ、「親の側面」でのストレスや抑うつ症状を改善する可能性が示された。また父親の育児参加は「食事」や「オムツ交換」「ぐずった時になだめる」が効果的である可能性が示唆された。

本研究は「やずや食と健康研究所助成金」を受け実施した。